

# 建学の精神と別府大学文学部の歴史

## —別府大学 70 周年によせて—

佐藤 瑠 威

別府大学は、多数の教員が協力分担する「大学史と別府大学」という科目を2009年に開講し、最初の科目担当者であった筆者は、別府大学の建学の精神「真理はわれらを自由にする」について講義を行っていた。

建学の精神の意味と由来については、これを定めた佐藤義詮学長が亡くなった1987年の夏に調べて、別府大学附属図書館報『アルゴノート』に「VERITAS LIBERAT 出典探索始末記」と題する文章を書いた。この拙文では、題目のように、別府大学の建学の精神「真理はわれらを自由にする」という言葉の出典を明らかにすることを目的とした。

佐藤義詮はこの建学の精神を自ら定めたと言って、別府大学の理念を象徴するものとしてこの言葉を入学式などの折に語るのを常としていたが、文書の形においてこの言葉の意味や由来について詳しく述べることはなかった。佐藤義詮の死後、別府大学の象徴ともいべきこの言葉の意味について問われる機会があり、筆者はその年の夏に調べることにしたのである。

ただ、佐藤義詮がこの言葉にどんな意味を込めて語っていたのかは、筆者も記憶が定かではなかった。建学の精神「真理はわれらを自由にする」は常にラテン語の *veritas liberat* とともに用いられていた。すなわち、佐藤義詮は、ラテン語の *veritas liberat* という言葉から建学の精神の言葉を引き出してきたと考えられるのである。そこで、この言葉の意味を原語の由来から探っていこうとした。

多少聖書に親しんでいた人は、「真理はわれらを自由にする」という言葉は新約聖書に由来すると思っていた。『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」に、「真理はあなたがたを自由にするだろう」という有名な言葉があるので、別府大学の建学の精神も聖書の言葉に由来すると思ったわけである。

しかし、建学の精神の言葉が聖書に由来するなら、本人がそのことについて当然語るべきであるが、私の知る限り佐藤義詮が建学の精神について語る時に聖書に言及したことは一度もなかったと思う。佐藤義詮はギリシャ文学の研究を志した人で、ギリシャの古典についての教養は豊かであったが、キリスト者ではなく、キリスト教についても特別な関心は持っていなかった。別府大学もキリスト教と関係のある大学ではない。ヨハネによる福音書の有名な一節は、「真理はあなたがたを自由にするだろう」と訳されているように、原語は、*veritas liberabit vos* となっていて、*veritas liberat* ではない。以上のようなことを考慮に入れるとき、別府大学の建学の精神の言葉は、少なくとも聖書から直接引き出されたものではないと筆者は考えた。

聖書と並んで、別府大学の建学の精神の言葉と似た表現として、国立国会図書館法前文の「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命として、ここに設立される」という言葉がある。この言葉は、戦後、国会図書館を作るときに、当時参議院議員であった歴史学者の羽仁五郎の提案によって、国立国会図書館法前文に入れられたという。国立国会図書館の理念を表わすこの言葉は、別府大学の建学の精神の言葉とほとんど同じ表現となっている。ただ、国立国会図書館法前文の言

葉は昭和23年、1948年に制定されたのに対して、別府大学の建学の精神は、別府大学の前身である別府女学院、別府女子専門学校を1946年に創立するときに建学の精神として掲げられたといので、国立国会図書館法前文よりも早く定められたことになる。

それゆえ、佐藤義詮は聖書や国立国会図書館法前文以外の所から *veritas liberat* 「真理はわれらを自由にする」という言葉を引き出してきたことになるが、それについては本人は何も語っていないので、推測するしかない。私は、本学の山本晴樹名誉教授のご教示によって『ギリシア・ラテン引用語辞典』という本が戦前に岩波書店から出版されていたことを知ったが、この本は本学附属図書館にもまた佐藤義詮個人の蔵書のなかにもあった。この本の中に、*veritas liberat* という語があり、「真理は我々を自由にす」と訳されている。そこで筆者は、別府大学の建学の精神の言葉は、この本から引き出されたのではないかと考えたのである。

ただ、別府大学の建学の精神の言葉は聖書から直接引き出されたものではないにしても、国立国会図書館法前文の「真理がわれらを自由にする」という言葉が聖書の「真理はあなたがたを自由にするだろう」という言葉から採られたとされているように、*veritas liberat* という言葉の起源も遡っていけば、やはり聖書に行きつくのではないかと考える。

しかし、言葉の起源は聖書だとしても、別府大学の建学の精神の言葉も国立国会図書館法前文の言葉も、ヨハネ福音書においてイエスが語ったとされる言葉の語義から離れて、敗戦直後においてそれぞれの組織の理念や目的を表わす言葉として最もふさわしいと考えたがゆえに、この言葉を用いたのだと思われる。キリスト教の立場からすれば、真理は神によって啓示されるものとしてまず信仰の対象であるべきものであり、第一義的には学問的理性的探求の対象とされるものではない。別府大学と国立国会図書館は、場所も規模も知名度も異なるけれども、同じ時代に創られた学問に関わる組織として、聖書の文脈から離れて、学問的理性的探求を通してこそ人間は自由な精神を身につけることができると考えたのであると思われる。

佐藤義詮は、あるとき学生から「真理はわれらを自由にする」という言葉を建学の精神とした理由を問われて、戦争中の日本は自由と真理が弾圧されていたが、これからの日本は自由と真理を愛する若者を育てていかねばならないと考えたからである、と語ったと言う。（『真理と自由—佐藤義詮先生十回忌記念—』の中の佐藤信夫氏の「ものの核心を突くユーモア」）

戦争中の日本は、軍国主義とファシズムが国民を統制し、個人の自由は抑圧されていた。また、学問と教育も国家の監視と厳しい統制下におかれていた。学問の自由は大幅に制限されていた。敗戦によって、軍国主義とファシズムの体制が崩壊し、アメリカの占領統治のもとで民主化、近代化が進められ、個人の自由、学問の自由が保障されることになった。

抑圧的な体制がなくなったとき、人間は解放される。すなわち自由はまず解放を意味する。人間は「したいことをする自由」を得る。

哲学や思想史において、自由は＜恣意的・感性的自由＞と＜主体的・理性的自由＞とに区別される。恣意的・感性的自由とは、自分の欲望、衝動、感情のままにしたいことができることを意味する。これに対して、理性的自由とは、何が正しいのかを考えた上で、自分が正しいと判断したものを自ら選ぶことができることを意味する。このふたつの自由の概念と区別の根底には、明らかに主体的・理性的自由をより重視する考えが存在している。

恣意的・感性的自由は、その内容が欲望や衝動や感情に基づくものであるがゆえに低い次元のものと思なされると同時に、各人が恣意的・感性的自由のままに行動すれば、各人の自由意志が衝突し、社会の秩序は成り立たなくなると見なされる。もし、自由を単なる恣意的・感性的自由と同一視してしまえば、自由は積極的な意義、価値を持つものとは見なされなくなる。

明治維新後、明治政府は先進的な西欧諸国の文明を導入して近代的な統一国家を形成しようと

したが、自由や民主を求める自由民権運動が広がって政治的安定が脅かされたため、国家の統一と安定を優先する明治政府は、明治憲法と教育勅語を發布して個人の自由、人権、民主主義を抑制する天皇制国家の形成に向かっていった。戦前の日本においては、自由は恣意的・感性的自由と同一視され、社会の秩序を乱す要因と見なされたと言える。このような見方の延長線上に戦時中の極端な自由の抑圧が生まれることになった。

敗戦直後に全体主義的な国家から解放された時、国民のあいだには欲望にまかせてしたいことをしようとする恣意的・感性的自由が一時的にはかなり横行していたと言われる。もし、戦後日本における自由が恣意的・感性的自由のままに留まっていれば、自由が積極的な意義や価値を持つことはなく、日本が近代的な民主主義国家となることはできなかっただろう。自由が積極的な意義と価値を持つためには、それは主体的・理性的自由へと発展していかなければならない。

佐藤義詮は、「真理はわれらを自由にする」という言葉を建学の精神とした理由を述べた時、敗戦直後の別府にはアメリカの占領軍がいて、別府の若い女性がアメリカ兵と腕を組んで歩いていたのを見て、日本の復興はこれらの女性に高等教育を授けることから始めなければならないと思ったと言う（前掲 佐藤「ものの核心を突くユーモア」）。彼の目には、敗戦直後に与えられた自由はまさに自分の欲望のままに行動しようとする恣意的・感性的自由の発露でしかないと思われたのである。彼は、この自由を積極的な意義を持つものへと変えていかなければならないと考えたのだろう。彼にとって、高等教育、大学教育の第一の目的は、より高い次元の自由を持った人間を形成することであった。それは自ら考えて何が正しいのかを判断し、そして自分が正しいと考えたことに基づいて生き、行動していく人間であり、そういう自由を身につけるためには、学問を通しての真理探究が不可欠であると考えたのだと思われる。「真理はわれらを自由にする」という言葉の意味はそこにある。

佐藤義詮は、この建学の精神を実現するために、文学部を創ろうとした。建学の精神を掲げて1946年に創立された別府女学院、別府女子専門学校のあと、1950年に設置された別府女子大学は、国文と英文の二専攻からなる文学部として発足した。

別府大学の歴史には、地方に創られた大学としては、ほとんど他に例のない特徴がある。別府女子大学は、新制大学制度が始まった1949年の翌年に創られた。1949年にすべての都道府県に国立大学が設置されると同時に、1948年と1949年に100校近い私立大学が新制大学として認可された。しかし、私立大学は主として東京、大阪、京都などの大都市圏に創られただけで、地方においては私立大学が存在しない県は存在する都府県よりもずっと多かった。別府大学が創立された1950年に私立大学が存在していた地方都市は、宮城県仙台、和歌山県、奈良、岡山、広島、愛媛県の松山と福岡だけだった。他はすべて東京、神奈川、千葉、愛知、京都、大阪、兵庫などの大都市圏に集中している。敗戦後間もない時期に、別府のような地方の小都市に作られた大学は、和歌山の高野山大学と奈良の天理大学くらいである。

しかも、別府大学の際だった特徴は、地方の小都市にありながら文学部の大学として創立されたことである。現在約800に及ぶ日本の大学には実に多様な学部名があるが、戦後間もない時代においては、文学部は経済学部、商学部、法学部などと共に、人文系の代表的な学部であり、1950年前後の時期にすでに私立大学にも数十の文学部が開設された。しかし、私立大学の文学部はやはりほとんどが大都市圏に作られたのであり、地方の私立大学が設置したのは主として商学部や経済学部であった。既述のように、1950年前後の時期に別府のような地方の小都市に大学が創られたこと自体が極めて珍しいことであったが、文学部の大学を創ったことは驚くべきことである。

確かに、同時期に地方で創設された和歌山の高野山大学や奈良の天理大学も文学部の大学であり、そのほかにも宮城県の東北学院大学や岡山のノートルダム清心女子大や広島県の広島女学院大学、福岡の西南学院大学なども文学部か文学部に類似した学部を設置した。しかし、これらの大学はすべてキリスト教や仏教などの宗教団体を母体とする大学である。別府大学のような宗教団体を基盤としない地方の私立大学が戦後間もない時代に文学部の大学を創った例はない。

私立大学は学生の学費を主たる財源として運営される経営体であり、学生数は大学の存立を左右する。それゆえ多くの私立大学は人口の多い大都市圏に、多くの入学者を見込める学部を作っていくとした。九州を例にとれば、別府大学と同時期に創られた4つの私立大学はすべて人口の多い福岡県の大学であり、キリスト教系の西南学院大学を除けば、商学部あるいは法学、経済学の学部の大学として創設されている。

つまり地方においては、私立大学は人口の増大に伴って、進学者の見込める学部から創られていったのであり、文学部の大学は例外なしに宗教団体を基盤とする大学であった。すなわち別府大学は、大学進学者が少なかった戦後間もない時代に、人口の少ない小都市に、宗教団体を基盤としないで文学部の大学、しかも女子大学として創立されたという点において、日本の大学の歴史において他に例を見ない大学であった。それゆえ、別府大学の歴史を考える時、それが文学部の大学として創られたということの意味を考える必要がある。

私立大学は、教育や学問研究と経営という容易には調和しないもの、むしろしばしば相矛盾する問題を両立させることを避けがたい課題とする。この課題に直面して、多くの私立大学、特に地方の私立大学は、まず経営の安定を重視した。多くの大学がまず短期大学を設置し、いわゆるベビーブーム世代が大学に進学してくる1960年代、それは高度経済成長期でもあったが、その時になって社会的需要のある経済学部や工学部の大学を作っていくとしたことに現われている。私立大学を経営体として考えれば、このようなやり方は理に適った進め方であったと言える。

別府大学が1950年に文学部の大学を創設しようとしたことは、日本の大学の歴史において極めて特異な試みであった。佐藤義詮は、私立大学の存立に不可避の経営の安定よりも、建学の精神に基づいて、自らが理想とする人間の育成のために必要な学部を創ることを優先したのである。別府大学の歴史において文学部の創設は建学の精神から必然的に導き出されたものであった。

佐藤義詮が文学部の創設に込めた考えは、文学部教育こそが自由と真理を愛する新しい時代の人間を形成するうえで最も必要な学部であるということだった、と思われる。佐藤義詮は西村伊作が東京で創設した文化学院で学んだが、文化学院はまさに自由な雰囲気の中で当時の一流の作家、芸術家が講師になって文学や芸術を教授する学校だった。佐藤義詮は文化学院で、すぐれた文学や芸術についての理解や見識を深めると同時に、文学や芸術、それに哲学などの学問を通して自らの人間性を形成していったのだと思われる。

別府大学の文学部は、自由を重んじること、あえて小規模の学校であろうとしたこと、文学に加えて芸術も教育の柱としたこと、これらの点において文化学院の個性や理想を引き継いでいくとしたように思われる。文化学院の理想を引き継いだ大学を創るためには、文学部を創らねばならなかったのだ、とも言える。

数年前に文系学部を廃止する動き、あるいはその存在理由を疑問視する見方が現われたことがあった。文学部は、長い間経済学部や法学部とともに文系学部の主要な学部であった。現在でも、全国で国公立を合わせて100以上の文学部があり、文学部と重なる学科の多い人文学部は50以上ある。しかし、明らかに文学部は減少傾向にある。特に人口減少が続く地方の大学の文学部は、今やその存立自体が危うくなりつつある。実際、九州に限って言えば、西南学院大学や活水女子大学や九州女子大学の文学部は改組などによってなくなり、今や別府大学の他には福岡県

の久留米大学と筑紫女学園大学に文学部があるだけである。

金子元久氏によれば（『大学の教育力』ちくま新書 2007年）、歴史的に見て、大学教育の目的は職業準備教育と教養教育と学術専門教育との三つであったと言う。中世ヨーロッパに始まる大学は、神学部と法学部と医学部が主たる学部を成し、それぞれが聖職者と法律家と医者を養成する職業準備教育の性格を持っていた。中世ヨーロッパの大学は、基本的に職業準備教育でありながら、同時に専門教育とともに学芸学部で自由七科と言われる教養教育を教授していた。近代になって、大学は一方において、様々な職業のための準備教育へと職業準備教育の内容を拡大していくが、19世紀のドイツを中心にして大学は学問研究を自らの使命と考えるようになり、学術専門教育が大学教育の目的とされるようになったと言う。20世紀において大学が急激に増大していった背景には、19世紀以後の近代社会の発展によって様々な領域で職業準備教育の需要が増したことと、諸科学の進歩によって学術専門教育の必要性が増したことがあったと思われる。

文学部は明らかに職業準備教育ではなく、学術専門教育や教養教育の性格を持つ。他の学部の学問が世界のもろもろの存在や現象を科学的客観的に研究しようとするものであるのに対して、文学部の学問が対象とする文学や哲学、思想、芸術などは人間が創造した最も優れたもの、人間の作品である。文学部の学問はそれらの作品、古典を研究し理解しようとすることによって人間性を高め、深め、豊かにすることを目的とする。その意味において、本来、文学部教育は最も重要な教養教育でもある。佐藤義詮が別府大学を文学部の大学として創設した理由は、まさに文学部教育こそが優れた人間性の形成のために必要なものだと考えたからであると思われる。

現在、文学部が厳しい状況に立たされている理由は、それが他の学部と異なって、少なくともこれまでは職業準備教育の性格をほとんど持たなかったことと、それゆえに学術専門教育としても研究者を育成する以外に社会から必要とされることが乏しいこと、そしてさらに、戦後の日本においては経済主義的価値観が拡大し主導するようになって、本来文学部教育の重要な特質であるべき教養教育の意義が、日本の大学の歴史において一般教育がたどった歴史に象徴されるように、ほとんど重要視されることがなかったこと、によるとと思われる。

既述のように、別府大学は敗戦直後の時代に建学の精神を掲げて人間形成のための高等教育の学校として創設され、この創設の理念を引き継いで新制大学制度発足直後に国文学と英文学を専門とする文学部の大学として歩みを始めた。しかし、地方の小都市に創られたこともあり、最初は入学者は極めて少なかった。草創期の厳しい時代の別府大学を支えたのは、1954年に創立された短期大学であった。やがて1963年に賀川光夫教授が中心になって設立した史学科に多数の入学者が入るようになって、文学部は経営的にも安定した学部となった。別府大学は70周年を迎えたが、これほどの長きにわたって地方の小都市に文学部として存在している大学は日本全国にも五指に満たない。

文系学部廃止論が語られる状況の中で、別府大学が今後とも文学部を堅持していこうとするならば、文学部のあり方をさまざまな視点から問い直すことが必要であると思われる。

文学部とは何か、文学部教育の意義は何か、という問題は、この小論で考察することはできないし、また筆者の能力を超えた問題であるが、別府大学文学部の70年の歴史の過半を過ごしてきたものとして日頃感じ、考えてきたことを少し述べたい。

既述のように、金子元久氏によれば、大学の歴史において、これまでの大学は職業準備教育と教養教育と学術専門教育のいずれかに重点を置いてきた。しかし日本の大学においては、教養教育は戦後、一般教育という名のもとに専門教育の準備教育として行なわれていただけで、重点は職業準備教育と学術専門教育とに置かれていた。多くの学部は職業準備教育と学術専門教育との両方の性格を備えているのに対して、文学部の特徴は職業準備教育という性格をほとんど持たな

いことにあった。それゆえ、文学部の学問は就職には役に立たないもののように見なされ、実際に文学部は地方の小都市に設置されることはほとんどなく、大半は大都市圏に設置され、入学者も長い間卒業後に就職しない学生の多かった女子学生が非常に多い傾向にあった。文学部は、一般的な傾向として、特別な文学好き、文学青年のような人たちが、あるいは日本の大学においては軽視されている教養教育を求める（女子）学生が進む学部であったように思われる。

別府大学文学部は、地方の小都市にありながら70年という長い歴史を経てきたが、国文学と英文学の二つの専攻分野から始まった当初の学生数は非常に少なかった。1963年に史学科を設置してから学生数が増えていき、1970年代以降は順調に歩みを進めてきた。しかし、その内実を調べれば、それは当初の意図とは異なる方向に進むことによって結果的に発展することになったのだと思われる。別府大学文学部は史学科を設置して以後学生数が増大していったが、本学の史学科の中心は考古学であり、考古学を学んだ学生から多くの自治体で埋蔵文化財の専門員として就職する卒業生が現われた。すなわち史学科の考古学部門は、学術専門教育であると同時に職業準備教育という性格を持つようになり、そのことが本学の史学科の際だった特色となった。

大都市圏に設置された通常の文学部は、職業準備教育ではなく、学術専門教育と教養教育に重きを置いていると思われる。本学の文学部は、地方の小都市の文学部という極めて厳しい条件のもとで、建学の精神に基づいて学問を通しての人間形成、すなわち本来の、真の意味の教養教育を目指そうとした。しかし、理想と意図の高邁さにもかかわらず、時代に先駆けての地方の小都市での文学部の創設という企ては、最初から入学者の少なさによる経営上の困難に直面した。それにもかかわらず、文学部が危機を乗り越えることができたのは、1954年創設の短期大学が商科と生活科の栄養士養成課程を設置して多数の入学者が入ってくるようになったことと、1963年創設の史学科が1970年代から目覚ましい発展を遂げて毎年100名以上の入学者が入ってくる大規模な学科となったことによる。史学科の発展の要因は、その教養教育によるのでもなければ、学術専門教育の内容だけでもなく、既述のように、その職業準備教育という性格を持っていたことにあると思われる。

既述のように、建学の精神と文学部の創設とは切り離すことのできない関係にあるが、別府大学がこれからも文学部の大学であろうとするためには、学問を通しての人間形成という創立時の原点と理想に立ち返って文学部教育のあり方を考えていくことと、その創立時の高邁な理想にもかかわらず、別府大学文学部が70年の歴史を経ていくためには、創立の理想とは別の要因に恵まれることが必要であった過去の歴史から学ぶことが必要である。

18歳人口の減少による大学の危機が語られるようになってから久しいが、特に地方の人口減少は深刻である。別府大学は、もともと人口の少ない地方においてあえて文学部を創設することによって幾多の困難を経験してきたが、前途には加速する人口減少とAI革命などによる急激な社会変動がもたらす困難が待ち受けている。

科学技術の急速な進歩によって、現在ある仕事の多くが人工知能に取って代わられると予想されており、他の学部においても現在ある職業との結びつきが失われたり、大きく変わっていく可能性があるが、もともと時代の変化や社会の動きと直接関係することのない文学部の学問と教育とに何の意味があるのかが、おそらくこれまで以上に問われることになるだろう。文学部の未来は、他の学部にはない文学部教育の特質である人間形成としての真の教養教育のあり方を探求していくことと、そしてさらに、社会が急激に変化し、それに伴って人間の職業形態も大きく変わっていく時代にあって、専門的知識を超えた広い視野と知識を養うことによって、どんな時代、どんな社会においても必要とされる普遍的な人間性を形成していくことにあるのではないかと考える。